

子どもに対する父親の意識

— SCT-IKSによる分析 —

庄司 順一¹⁾，川井 尚¹⁾，恒次 欽也²⁾
野尻 恵³⁾，若麻績佳樹⁴⁾

要約：父親の子どもに対する意識を知るために、われわれが開発したSCT-IKSにより乳児の父親200名を対象に調査を行った。その結果、父親は子どもにポジティブな感情をもっていることが多く、子どもとのかかわりを楽しんでいるようすがうかがえた。しかし、子どもとのかかわりを負担に感じることも少なくなく、とくに泣きに対しては戸惑いや、いらだち、怒りを感じたり、母親にまかせてしまう傾向が見られた。

児の生まれる前（つまり妻の妊娠期）における調査結果（PKS）と比較し、検討を行った。PKS、IKSとも、それぞれの時期についての項目により現実的な反応が多くみられた。

見出し語：父親 父子関係

【目的】

従来、アンケート法による父親の意識や心理状態についての研究は多いが、いくつかの選択肢の中から強制的に答えを求める方法では、おおよその傾向は認められるにしても、父親の意識の詳細について知ることはむずかしい。もっとも望ましいのは面接法であるが、これは実施が困難である。そこで筆者らは、臨床心理検査の1方法である文章完成法（SCT）により、父親の子どもに対する意識をより詳しく検討することを試みた。

【方法】

1) SCT-IKS男性版：これは生後9～12カ月頃の乳児をもつ父親を対象とし、この時期における父子関係および父親の心理状態を知ることが目的として作成されたものである。23項目からなり、領域Ⅰ 父子関係、領域Ⅱ 父親の心理状態、領域Ⅲ 母子関係、の3領域を想定している。なお、IKSには、母親を対象とした女性版もあり、両者の項目は対応するようになっている。また、SCTには、IKSのほか、妊婦とその夫（PKS）、新生児の母親

1)日本総合愛育研究所・愛育相談所 2)愛知教育大学 3)桜が丘記念病院 4)都立母子保健院

(NKS)、幼児をもつ母親と父親(TKS)を対象としたものもある。

2) 対象: 対象は、乳児をもつ父親200名である。いずれも都立母子保健院において生まれたものである。

父親(本人)の平均年齢32.2歳(SD4.7歳)、母親(妻)の年齢30.9歳(5.4歳)、子どもの月齢は10.0カ月(2.7カ月)、児の性別は男児58.5%、女児41.0%、出生順位は第1子41.5%、第2子46.5%、第3子9.5%、第4子1.5%であった。

3) 整理方法: 各項目について反応をそのまま転記し、グルーピングを行い、原意を損なわない形の表現にまとめて、反応カテゴリとした。

【結果および考察】

ここでは、父親と子どもとの関係に関する8項目について検討する。

1) 反応カテゴリとその頻度

I-2「子どもがいると私は」では、うれしい・楽しい(30.0%)、心が和む(14.0%)、いっしょに遊ぶ(10.5%)、父親の実感(5.0%)など、ポジティブな反応が過半を占めるが、気が休まらない(4.0%)、何もできない・非常に疲れる・気になる・うるさいなど(その他ネガティブ8.0%)と、ネガティブな反応が10%以上みられた。

I-7「妻の妊娠に気づいたとき私は」では、うれしかった(38.5%)、責任・実感を感じた(9.0%)などポジティブな反応に対し、びっくりした(6.5%)、何も感じなかった(4.5%)、あせった(4.5%)という反応もみられた。

I-8「私は子どもと」では、遊ぶようにし

表1 子どもがいると私は(I-2)

反応カテゴリ	%
1 Rej	2.0
2 Fail	1.0
3 特異反応	0.0
4 その他(ニュートラル)	11.0
5 その他(ポジティブ)	6.5
6 その他(ネガティブ)	8.0
7 うれしい。楽しい。幸せ	30.0
8 心が和む。ほっとする	14.0
9 いっしょに遊ぶ。相手をする	10.5
10 楽しいが疲れる	8.0
11 父親の実感。責任感	5.0
12 気が休まらない。落ち着かない	4.0

(注) ここでは7以下のカテゴリには4%以上の頻度のみられたものとした。また1~6のカテゴリの説明は次のとおり。

1 Rej: 回答拒否(その項目の回答なし)

2 Fail: 回答失敗(その項目以後すべての回答なし)

3 特異反応: とくに気になる、心配なネガティブな反応

4 その他(ニュートラル): 7以下のカテゴリに分類されない反応で、ポジティブでもネガティブでもないもの

5 その他(ポジティブ): 同様に、ポジティブな反応

6 その他(ネガティブ): 同様に、ネガティブな反応

表2 妻の妊娠に気づいたとき私は(I-7)

反応カテゴリ	%
1 Rej	1.0
2 Fail	1.0
3 特異反応	1.0
4 その他(ニュートラル)	10.0
5 その他(ポジティブ)	8.5
6 その他(ネガティブ)	3.5
7 うれしい。よろこんだ。感激した	38.5
8 父親になった。責任を感じる	9.0
9 無事に出産を。母子ともに健康で	8.0
10 びっくりした。おどろいた	6.5
11 あせった。うろたえた。困った	4.5
12 何も感じなかった	4.5
13 男(女)の子がよい	4.0

表3 私は子どもと(I-8)

反応カテゴリ	%
1 Rej	1.0
2 Fail	1.0
3 特異反応	0.5
4 その他(ニュートラル)	4.0
5 その他(ポジティブ)	7.5
6 その他(ネガティブ)	1.5
7 遊ぶようにしている。	25.0
8 いっしょに遊ぶ。よく遊ぶ	21.5
9 遊ぶと楽しい	13.5
10 友だちのように。共に成長したい	10.0
11 遊んであげられない。時間がない	8.0
12 親子。似ている	6.5

表4 おなかの赤ちゃんが動いたとき(I-12)

反応カテゴリ	%
1 Rej	3.0
2 Fail	1.0
3 特異反応	3.0
4 その他(ニュートラル)	8.5
5 その他(ポジティブ)	8.5
6 その他(ネガティブ)	2.5
7 不思議。生命の神秘	21.0
8 生きている実感。成長を実感	14.5
9 感激。感動	13.5
10 無事に生まれて。元気で育って	9.0
11 うれしかった。よろこんだ	7.5
12 おどろいた。びっくりした	4.0
13 わからない。べつに感動しなかった	4.0

表5 子どもが泣きやまないと(I-13)

反応カテゴリ	%
1 Rej	0.5
2 Fail	1.0
3 特異反応	0.5
4 その他(ニュートラル)	10.0
5 その他(ポジティブ)	2.0
6 その他(ネガティブ)	9.5
7 あやす。話しかける。なだめる	18.0
8 妻にまかせる。妻をよぶ	13.5
9 いらつく。いらいらする	10.5
10 困る。どうしていいかわからない	9.5
11 うるさい	7.5
12 原因をさぐる	6.5
13 心配する(病気ではないか)	6.0
14 泣きたくなる。つらくなる	5.0

ている(25.0%)、いっしょに遊ぶ(21.5%)、遊ぶと楽しい(13.5%)など、ほとんどがポジティブな反応であった。しかし、遊びたいが遊べない・遊ぶ時間がない(8.0%)という反応もあった。

I-12「おなかの赤ちゃんが動いたとき」では、生きている実感(14.5%)、感激(13.5%)、無事に生まれて(9.0%)、うれしかった(7.5%)と、ポジティブな反応が多いが、わからない(4.0%)という実感の乏しい反応もみられた。

I-13「子どもが泣きやまないと」では、あやす(18.0%)、原因をさぐる(6.5%)に対して、困る(9.5%)、妻にまかせる(13.5%)ということも多く、また、いらつく(10.5%)、うるさい(7.5%)、怒る(3.5%)など、ネガティブな反応がやや目立った。

I-17「妻と私は」では、仲がよい(21.5%)、育児を協力しあう(9.5%)、うまくいっている(6.5%)、よく話しあう(5.5%)、一心同体(4.5%)、その他のポジティブ反応(13.0%)と約60%は明確にポジティブな反応であった。よくケンカする(4.5%)は気になる反応である。

I-18「子どもが生まれて私がかわったことは」では、とくにない(20.0%)が比較的多いが、その他は、父親の実感(17.5%)、家に帰るのが楽しい(9.5%)、性格がポジティブに変化(9.5%)、子ども中心になった(8.0%)、子ども好きになった(6.0%)など、ポジティブな反応がほとんどであった。

I-22「私は父親として」では、がんばる(17.0%)、責任感がある(8.5%)など、まあまあ・合格(7.5%)も含めて、多くがポジティブ

表6 妻と私は(I-17)

反応カテゴリ	%
1 Rej	3.0
2 Fail	1.0
3 特異反応	0.5
4 その他(ニュートラル)	10.0
5 その他(ポジティブ)	13.0
6 その他(ネガティブ)	5.0
7 仲がよい	21.5
8 夫婦	11.5
9 育児を協力しあう	9.5
10 うまくいっている	6.5
11 よく話しあう	5.5
12 一心同体	4.5
13 よくケンカする	4.5
14 結婚して～年。年齢差	4.0

表7 子どもが生まれて私のかわったことは (I-18)

反応カテゴリ	%
1 Rej	2.0
2 Fail	1.0
3 特異反応	0.0
4 その他(ニュートラル)	7.5
5 その他(ポジティブ)	11.0
6 その他(ネガティブ)	4.0
7 とくにない	20.0
8 父親としての自覚、実感	17.5
9 家に帰るのが楽しい。	9.5
10 性格がポジティブに変化	9.5
11 子ども中心に。子どものために～	8.0
12 子ども好きに。よその子もかわいい	6.0
13 子どもへの責任感	4.0

な反応といえる。失格かもしれない・まだまだ未熟は8.0%であった。

以上をまとめると、妻の妊娠（I-7）や胎動（I-12）については、ポジティブな反応が多いが、それぞれ何も感じなかった、あるいはわからないという実感の乏しい反応も若干みられた。

子どもとのかかわりについては、子どもと（I-8）遊ぶことをポジティブにとらえている。しかし、子どもがいると（I-2）、実際には気が休まらなかったり、何もできなくなったりするし、とくに子どもが泣きやまないと（I-13）いらついたり、うるさいと思ったりし、子どものことは妻にまかせてしまうことも多い。

妻との関係（I-17）はおおむね良好である。

表8 私は父親として(I-22)

反応カテゴリ	%
1 Rej	1.5
2 Fail	1.5
3 特異反応	0.5
4 その他(ニュートラル)	9.5
5 その他(ポジティブ)	19.5
6 その他(ネガティブ)	4.0
7 がんばる。努力する	17.0
8 責任感がある	8.5
9 失格かも。まだまだ未熟	8.0
10 まあまあ。合格	7.5
11 何か教えた	7.5
12 できるだけのことをする	5.5
13 家族を守る	5.0
14 尊敬されたい	4.5

子どもが生まれて自分のかわったことは（I-18）ポジティブな方向への変化であり、父親としては（I-22）責任感をもち、がんばっていきたく思っている。

2) 妊娠期（PKS）との比較

次に、妊娠期（PKS）（庄司ほか，1985，川井，1990）と乳児期（IKS）との比較検討を、ほぼ同じ内容の質問項目についてする。

「おなかの赤ちゃんが動いたとき」（IKS-12）「おなかの赤ちゃんが動く」と（PKS-17）

PKSでは、元気に育っていると安心(24.3%)がもっとも多い反応であった。耳をあててきく、おなかにさわる、話しかける(9.3%)などの具体的な行動を表した反応と、出産日がまちどおしい(8.1%)はIKSにはみられなかった。他方、IKSでは、ふしぎ(21.0%)がもっとも多い反応であった(PKS 8.9%)。

このように胎動については妊娠期ではより現実的、具体的な反応が多く、乳児期になると、現実感が薄らいで、当時の印象にもとづくやや漠然とした反応が多くなるといえる。

「私は子どもと」（IKS-11、PKS-11）遊びたい、遊ぶと楽しいの頻度は差がないが、PKSでは、いっしょに～したい(25.9%)と願望の形で述べていたのに対し、IKSでは、いっしょに遊ぶ(21.5%)とより現実的な反応になっている。遊んであげられない(8.0%)はIKSだけにみられる反応であった。胎動に関する項目とは逆に、この項目ではIKSの方が、現実感のある反応になっている。

「子どもが泣きやまないと」（IKS-13、

PKS-34)

PKSでもっとも多い反応は、困る、あせる(21.5%)であり、次いで、うるさい、腹が立つ(19.4%)であった。IKSでは、いらだち、うるさい、怒る(21.5%)はPKSの同様の反応とほぼ頻度は同じであるが、困る(9.5%)というのは少なく、あやす(18.0、PKS8.9%)が多くなっている。他方、妻にまかせる(13.5%)も、IKSの別室で寝る、室から出ていく(6.5%)より多い。PKSでは、いわば想像しての反応であったのに対して、IKSではより現実的になっているといえる。PKSでもIKSでも、子どもの泣きに対して強いいらだちを示す反応が約20%あることが注目される。父親は子どもの泣きに弱いともいえよう。

【結論】

乳児をもつ父親200名にSCT-IKSを施行し、それぞれの項目に対する反応カテゴリとその頻度を検討した。また、ほぼ同じ内容の項目によって、妊娠期(PKS)と今回の乳児期(IKS)の結果を比較した。

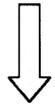
父親は子どもに対してポジティブな感情をもち、子どもとの遊びを楽しんでいることが多く示されたが、子どものかかわりを負担に感じ、とくに泣きに対してはいらだちや怒りを感じることも少なくないことがあきらかとなった。

妊娠期(PKS)との比較では、胎動につい

ては妊娠期では現実感のある具体的な行動を示唆する反応がみられ、乳児期(IKS)になると、これは過去のものとなり、やや漠然とした反応になっている。子どものかかわりについては逆に、妊娠期では想像による観念的ともいえる反応がみられたのに対し、乳児期には現実感のある反応になっている。こうした変化は、そのときどきの体験にもとづく適応的なものと考えられ、いずれの時期においても子どもに対する父親の意識・態度はポジティブであることが多いが、その内容は体験により変化していくといえる。また、一部ではあるが、子どものかかわり、とくに子どもの泣きに対してストレスフルに強く感じるものもいる。今回得られた結果は、必ずしも「よい」あるいは「望ましい」父親だけがいるのではなく、育児について困り、悩み、妻に助けを求める父親が決して少なくはないことを示していると考えられる。今後、父子関係とそれを支える母親(妻)の役割に関する検討が必要といえよう。

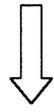
【文献】

- 1) 庄司順一・恒次欽也・川井 尚ほか：妊娠期の母子関係(4)SCT-P男性版からみた妊婦の夫の心理。乳児発達研究, 7, 1-6, 1985.
- 2) 川井 尚：父子関係研究の今後の課題。周産期医学, 20, 538-541, 1990.



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:父親の子どもに対する意識を知るために、われわれが開発した SCT-IKS により乳児の父親 200 名を対象に調査を行った。その結果、父親は子どもにポジティブな感情をもっていることが多く、子どもとのかかわりを楽しんでいるようすがうかがえた。しかし、子どもとのかかわりを負担に感じることも少なくなく、とくに泣きに対しては戸惑いや、いらだち、怒りを感じたり、母親にまかせてしまう傾向が見られた。

児の生まれる前(つまり妻の妊娠期)における調査結果(PKS)と比較し、検討を行った。PKS、IKS とも、それぞれの時期についての項目により現実的な反応が多くみられた。